

# Roine Stolt



新しいドラマーが決まった直後の  
本誌独占インタビューです

(2008年3月 Eメールにて)

Q: まず最初に「The Sum of No Evil」について聞かせてください。「The Sum of No Evil」が発売されてから数ヶ月経ちますが、ファンやメディアの反応はどうですか？

Roine Stolt (以下RS): とても、とても良いよ。ホント、みんな好きみたいだ。懐疑的な人達までも好んでくれているみたいだ。殆どの人は新しいアルバムの「シンフォニック・スタイル」をととても好意的に受け入れてくれている。とても強力なメロディックなアルバムだし、演奏もトップクラスだ。言っておかないといけないのは、特に

Zoltanのプレイだよ。だから、このアルバムは息が長いと思う。

Q: 「Adam & Eve」を発表した頃、過去のアルバムを挙げてルーツ回帰とよく仰っていましたよね。しかし、それ以降に出されたアルバム（「Adam & Eve」、「Paradox Hotel」、「The Sum of No Evil」）はとても違うアルバムです。あなたにとって、原点回帰とはどういったものでしょうか？

RS: 僕たちは初期に持っていたシンフォニック・スタイルのエキサイトメントを取り戻そうとしていたんだと思う。僕たちにとって、ルーツとはもっとヴィンテージなプログレッシブ・ロックのスタイルのことだよ。アルバムで言うなら「Retropolis」や「Stardust We Are」だね。

Q: 「The Sum of No Evil」でそのルーツ回帰は達成出来たと思いますか？

RS: 勿論。でも、僕たちは当然10年前と同じアルバムは作らない。僕たちは僕たちのルーツを自覚しながら、前を向くんだ。未来に向けて新しいことに挑戦する。今ではシンセサイザーやサンプラーを使って、とても楽しいことが出来るから、前に進みながら、新しいアイデアやサウンドを試してみるんだ。

Q: 「The Sum of No Evil」の歌詞についてコメントしていただけますか？

RS: えっとね…。いや、止めておこう。それをするには凄いな時間がかかってしまうよ。僕にとって大切なことだし、それに誤解されたり、間違ったアイデアを植えつけないんだ。時にはファンが自分自身で受けた印象からそれを作り上げるのも良いことだと思うよ。また、別の機会にね。

Q: 次にツアーについてお聞きします。'07年の秋の欧州ツアーにKING CRIMSONのドラマー、Pat Mastelottoが参加しました。どのようにして決まったのですか？

RS: いくつかの異なる理由から、僕たちはZoltanと一緒にツアーに行けないことになった。彼はとても良いドラマーだけど、他のメンバーとのケミストリー等から、

ツアーには最適な選択ではないと判断した。それで、僕は色々を探してみても、Patに連絡してみた。僕はMR.MISTER時代から彼を聞いていたからね。そしてPatは「イエス」と言ってくれて、彼とツアーすることになった。勿論、それ以降拘束する条件は一切ナシでね。彼には今年、KING CRIMSONのギグがあるし、それに住んでいる所がテキサスだからね。僕たちの正規ドラマーの座に座るにはちょっと遠すぎる。でも長い間、やってみたいと思える人と一緒にプレイ出来る良い機会だったし、彼はとてもプロフェッショナルなミュージシャンで、スーパー・ナイス・ガイなんだ。それに彼のドラム・エレクトロニクスの使い方も好きだし、ユーモアも持っている人なんだ。

Q: 「The Sum of No Evil」ではZoltan Csorszがドラムをプレイしています。例えば、Patが最初から「The Sum of No Evil」で叩くという選択肢はなかったのでしょうか？

RS: いや、ないね。最初から僕たちの選択はZoltanだった。彼は、レコーディングでは素晴らしいものを入れてくれるからね。それに彼は近いし、お互いをよく知っている。とても簡単にリラックス出来るんだ。

Q: 今から振り返ってみて、Pat Mastelottoとの欧州ツアーはどうでしたか？ Patは今までTHE FLOWER KINGSにいたドラマーとも全くタイプの違うドラマーです。しかし、とても楽しそうでしたよね？

RS: そうだね。とても違っていた。でも、彼はとても馴染む努力をしてくれたし、全ての曲をよく理解してくれてきた。彼は素晴らしい仕事をしてくれたと思う。確かに他のドラマーと比べると多少ヘヴィなところはあったけど、ちょっとしたら、すぐに慣れてしまうんだ。正直に言うと、今までのどのドラマーよりも演奏面ではベストだと思う。曲に相応しいプレイをする。多すぎず、少なすぎず。ちょうど、

ぴったり…。ソリッドなビートを刻む発電所みたいなドラマーで、それでいて、サウンドも素晴らしい。それに彼のとても奇妙で素晴らしいパーカッションも足してくれた。彼はドラマー兼パーカッショニストってことだね。

Q: ライブで、新譜「The Sum of No Evil」からの曲を演奏するとき、新しい要素などを発見することはありましたか？

RS: いや、特にそういったことはなかったな。僕たちはレコードに忠実に演奏していたし。勿論、僕たち一人一人が何かしらの付け加えることはある。そして、ツアーを重ねていくうちに曲を更に形作っていく。

Q: どの曲を演奏するのが楽しかったですか？

RS: "Life in Motion"と"Love is the Only Answer"かな、多分。

Q: 今回のツアーでは「The Sum of No Evil」からの曲はもとより、他のアルバムからの曲もアグレッシブに演奏されていたと聞きました。それはやはりPatがドラマーになったからでしょうか？ それともTHE FLOWER KINGSが自然とその方向に向かっているのでしょうか？

RS: いや、僕は今回のツアーがヘヴィなセットだったとは思わない。きっと、そういう風に言った誰かから聞いたんだろうけど。いつも、誰かが何かしらの意見を言うんだ。それこそ「PatはTHE FLOWER KINGSにはヘヴィ過ぎる」とかね。でも僕はそう





\*

## THE FLOWER KINGS Euro tour 2007

\*photo by Lylian Pothron

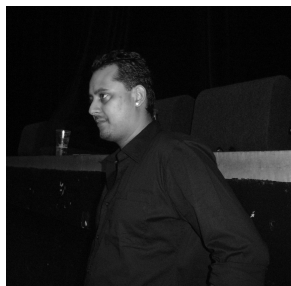
### 9月15日 Symforce Festival, 013 (Tilburg The Netherlands)

2007年9月15日、オランダのTilburgで第1回Symforce Festivalというプログレのフェスティバルが開催された。会場の013はTRANSATLANTICの「Live in Europe」や、THE FLOWER KINGSの「Instant Delivery」のDVD等が撮影された場所だが、今回は建物の中の3つのホールで同時進行、合計11バンドが出演するという太っ腹な企画。通常、フェスティバルという時間がか押してしまうものだが、このフェスティバルは運営が非常にしっかりとしており、最終的に遅れがわずか10分ほど。観客はヨーロッパ各地はもちろん、アメリカやブラジルからも来ていたようだ。主催者はこのフェスティバルを「ヨーロッパにおけるNEARfest的なもの」に育てていきたいということだったが、まずは順調なスタートを切ったのではないだろうか。メインホールにはまず地元の老舗バンドのFOCUSが登場し、RIVERSIDE、PENDRAGONが続いた後、THE FLOWER KINGSがトリを務めた。

PENDRAGONからのセット替えがスムーズに終了し、主催者挨拶に続いていよいよ

TFKの登場。ドラマーが空席の彼ら、この日は「The Sum of No Evil」のアルバムに参加していた元メンバーのZoltan Csorszを擁した編成だ。元々人気のあるZoltanだが、観客は主催者からこれがZoltanの最後のTFKのライブになると知らされたこともあり、Zoltanにはひととき大きな歓声が上がっていた。

オープニングは、ライブでしばらく演っていなかった「Retropolis」。私はステージに向かって中央の左寄り、つまりHasseとJonasの間ぐらいの最前列にいたのだが、さすがに周囲は熱心なファンだらけで、インストの曲だけど、歌う歌う。しかしステージがけっこう横幅がある上、高さもあるので、最前列からだだとドラムは殆ど見えないのだ…。途中からRoineの長いギター・ソロになり、そのまま違う曲に移行するのかと思ったら、「Retropolis」に戻って来た。ご機嫌そうなお機嫌そうお





イントロのベースの部分まで歌っちゃう人たち多数発生(笑)。この曲は2004年のツアーでは短縮バージョンで演奏していたが、今回は久々にフル・バージョンで、また、途中のTomasのキーボード・ソロが実にかっこよかった。

続いては、Roineがパーカーのギターから別なギターに持ち替え、新譜から"Life in Motion"を初披露。ベースのリフから始まったが、その前にJonasから観客に「拍手の指導」があり、その拍手に合わせてリフを弾くJonas。その後、1次はJonasとZoltanが遊ぶ時間だよ」とRoineが言い、ベース&ドラムのインプロ・タイムだ。Jonasがディストーションをかけた、スローだが邪悪なムードのリフを弾き始め、そこにZoltanが切り込んでくるような感じで応酬する。その後、Zoltanのダイナミックなドラム・ソロへ。

観客の歓声の中、Jonasがまたリフを弾き始め、バンドはインストの"Babylon"、そこからTomasの、moog系のちょっと不思議なキーボードでつなく感じて、"Hudson River Sirens Call"へ。エキゾチックかつ幻想的な雰囲気、この曲でもRoineが弾きまくっていた。そして再びJonasのベースのウォームなリフに導かれ、|Paradox Hotel|からの"What If God Is Alone"へ。ああ、やっぱり名曲だなあ。

「ちょっと古い曲を演るよ」というRoineのMCに続き、"There Is More to This World"、そして最後は雄大な"I Am the Sun"。この曲

はとても映像的だと思うし、不思議なエネルギーに溢れていて、広々としたところを自由に飛んでいるような、ある種の『開放感』を感じさせてくれるのだが、この日もまさにそういう気分になった。(なお、全てのバンドがそういう約束だったらしく、アンコールはなかった。)

Tomasは機材の調子がいまひとつだったのか、控えめなパフォーマンスだったような気がするし、ライブは去年の12月以来とあって、ツアー後半でのようなタイトさには多少欠けたが、やっぱりいつ観ても彼らのライブは楽しいし、久しぶりにZoltanのプレイを観られたのも嬉しかった。ファンの中には、|もうちょっと|Paradox Hotel|から演ってくれても良かったのに」という声もあったようだが、私は選曲はおそらくZoltan在籍中にライブで演っていた曲を中心にしたものになるだろうと思っていたし、そういった曲は去年のツアーでは演っていないものが多いので、特に新しいファンには珍しくて良かったのではないかと思う。

Symforce Festival set list:

1. Retropolis
2. The Truth Will Set You Free
3. Life in Motion
4. Bass & Drums Duet / Zoltan's solo
5. Babylon
6. Hudson River Sirens Call
7. What If God Is Alone
8. There Is More to This World
9. I Am the Sun